夏本番、琵琶湖畔で水遊びに興じる人々

比叡山時報

発行所
比叡山時報社
jihoh@deluxe.ocn.ne.jp
大津市坂本本町4220
郵便番号 520－0116
電話　077－578－0001
振替　00970 －2－ 9732
宗教法人延暦寺事務所
定価 1部110円 年1200円

延暦寺広報

叡山講福聚教会
会　報
年度会費（3000円）中に会報（比叡山時報）購読料を含む。

令和３年比叡山から発信する言葉

自他心を同じくす

ご購読は こちらから

琵琶湖の環境美化を思う

先日、２年ぶりに実施された「琵琶湖一斉清掃」に参加しました。新型コロナウイルス感染症のこともあり、密にならないようにとの注意も守りながら、町内会の大人約40名、１時間程度の清掃活動でした。範囲は近くの川沿いから河口付近一帯。草刈りも行ったため最終的には刈草や生活ゴミなど30袋はあったでしょうか。生活ゴミの中には食品の包み、ペットボトルや缶、瓶など形態や材質、大きさも様々あり、原型をとどめているもの、へこんでいるものや破片など多種多様なものがありました。水打ち際にあるプラスチックの破片を拾い上げたときのことです。これが昨今マスコミ報道等で取り上げられるマイクロプラスチックとなり、魚の口に入り最終的には人体に入っていくかもしれない…そう思うとぞっとしました。

滋賀県では、「環境美化の日」を定め、その日を中心に県内全域で環境美化活動に取り組んでいます。また滋賀県版ＳＤＧｓとして「マザーレイクゴールズ（ＭＬＧｓ）」の検討を進め本年７月１日に「マザーレイクゴールズ（ＭＬＧｓ）アジェンダ」を策定、「清らかさを感じる水に」や「豊かな魚介類を取り戻そう」、「水辺も湖底も美しく」など13のゴールが設けられました。

琵琶湖には他の問題もあります。その一つが、琵琶湖の深呼吸と呼ばれる「全層循環」です。「全層循環」とは琵琶湖の北湖で冬場の冷え込みにより酸素を多く含む表層の水が比重を増し下層の水と混ざり合う現象で、生態系の維持に不可欠とされます。それがここ数年地球温暖化による暖冬の影響からか確認されず、今年２月、３年ぶりに確認されました。関係者はほっと胸をなでおろされたそうですが、このような事態が続けば生態系に及ぼす影響は計り知れないのではないでしょうか。

我々の清掃活動中、そのすぐ近くでは釣りをしている人が多数おられました。それを見ながら、釣り人さん達はゴミが気にならないのかなぁと疑問に思いつつ終了しました。数日後、米国メジャーリーグベースボールで二刀流の大活躍しているロサンゼルス・エンゼルス大谷翔平選手が、一塁へ歩いていく途中にさりげなくゴミを拾う姿を拝見し恥ずかしくなりました。まさに「能く行う」。これこそ一隅を照らすだと。

比叡山と十二年籠山行

伝教大師1200年大遠忌記念

―前編―

十二年をかけ大師の真影に侍る

「論」「湿」「寒」「貧」、連綿と伝わる究極の行

「比叡山で最も清浄なる地」と称される宗祖伝教大師御廟所（浄土院）。この地には1200年を経て、大師が今もなお生き続けておられるがごとく、日々、「侍真」と呼ばれる僧によりお給仕が続けられている。今特集では、伝教大師一千二百年大遠忌を機に、十二年籠山行と侍真の制度を解説すると共に、本年4月1日に同行を満行しながら現役の侍真として、真に道心ある菩薩僧を目指す渡部光臣師（49・延暦寺一山本行院住職）を2カ月にわたり紹介し、行にかける思いや日々の行から会得した体験をお聴きする。

清らかな境内に盛夏の陽射しが差し込む

午後4時、境内には人影も途絶えた静寂のなか、拝殿にて晩課の勤行を修する

伝教大師祖廟「浄土院」

外界と遮断された清浄の地

根本中堂を総本堂とし、比叡山の中心地として参拝者の絶えない東塔地域から北西に歩み、弁慶水、山王院を経て、人影もまばらな長い石段を下ると、一歩一歩踏み出すことに引き締まる空気を感じることができます。しばらく坂を辿ると、正面に伝教大師の祖廟「浄土院」が見えます。

通用門から一歩足を踏み入れると、境内は拝殿から御廟まで常に掃き清め慶水、山王院を経て、人影もまばらな長い石段を下ると、一歩一歩踏み出すことに引き締まる空気を感じることができます。しばらく坂を辿ると、正面に伝教大師の祖廟「浄土院」が見えます。

この浄土院には令和となった今もなお、大師が定められた「十二年籠山行」が、「侍真」と呼ばれる僧により連綿と受け継がれ、一日たりとも欠かすことなく勤められています。

「大師の真影に侍る」が語源となる侍真は、元禄12年（1699）、安楽律の霊空光謙（1652～1739）によって、「籠山比丘をもって祖廟の侍真とする」と定められた『開山堂侍真条制』を踏襲しており、この制度に従い12年間にわたり一日も欠かすことなく大師宝前への献膳供養はもちろん、朝課・晩課の勤行が勤められます。籠山中には、境内から一歩たりとも外に出ることは許されません。たとえ病気になっても病院で治療を受けることもできません。その他、新聞やテレビ、インターネットを見ることも一切許されないので、外界とは完全に遮断されます。

また侍真は12年の間に、止観業（法華）か遮那業（密教）のいずれかを専攻し修学に務めなければなりません。日々の勤行、修学以外の時間に掃は、比叡山三大地獄の一つ「掃除地獄」に例えられるほど厳しく、この地が「比叡山で最も清浄なる地」である証左の一つとなっています。

1日2回伝教大師の御影に膳を供じ、勤行後侍真はそのお下がりをいただく

十二年籠山行とは

「最下鈍の者も必ず一験を得る」

十二年籠山行は、大師が国家に有用な国宝的人材を比叡山において養成するための制度と、大乗戒により大僧とすること定められた御廟内外の清

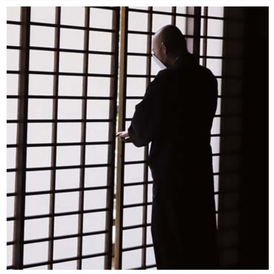
十二年籠山行は、大師が国家に有用な国宝的人材を比叡山において養成するための制度と、大乗戒により大僧とすること

を朝廷に求めた『山家学生式』に、「大戒を受け已らば、叡山に住せしめ、一十二年、山門を出でず、両業を修学せしめん」と明示されたことに端を発します。

年数の根拠について大師は、大乗戒律独立の論拠を示した『顕戒論』において、『蘇悉地羯羅経』の中に、「若し時念誦をなさば、十二年を経よ。縦ひ重罪ありともまた皆な成就せん。仮使ひ法員足せざるも皆な成就することを得ん」とあることを根拠にされ、「最下鈍の者も十二年を経れば必ず一験を得る」と、同行を制度化されました。つまり大師は、「どんな人でも12年間山に籠り、一つのことを継続し実践することで、霊験・法力を得られる」と仰っておられるのです。

大師は十二年籠山行を通して、『山家学生式』にある「一隅を照らす国宝的人材」の育成を教育理念に掲げ、多くの人々の役に立ち、仏法を弘める「菩薩僧」を中心とした、仏教による鎮護国家の実現に心血を注がれました。その思いは時代を越えて結果歴史上に多くの高僧を輩出することとなり、現在比叡山は「日本仏教の母山」と称されるようになっています。

炎天下のなか伝教大師御廟を掃き清める。御廟の周囲に張り巡らされた玉垣の内部には、侍真以外、たとえ延暦寺の僧であろうとも立ち入ることは出来ない



拝殿裏の障子をそっと開き大師の御魂に入りいただく

4人に1人が命を落とす

「不惜身命」で大師に仕える

歴代の侍真僧の名が残る『一乗僧階伝（浄土院蔵・三巻＝叡山文庫蔵書）』によると、元禄12年（1699）霊光謙によって、『開山堂侍真条制』が制定されて約320年の間、現在奉職中である渡部光臣師に至るまで、117名の籠山比丘が浄土院で修行生活を修したことがわかります。

比叡山は、冬期、日本海からのシベリア寒気団に曝されるため冷え込みが厳しく、麓の市街地より5℃ほど気温が下がります。とりわけ谷間の湧水豊かな浄土院の寒さと湿気は著しく、山内の気温からさらに2、3℃低下し、堂内は気温零下10℃以下に達することも珍しくありません。

このような環境のなか、侍真は一汁一菜の粗食を一日二食のみでひたすら修行に励み、加えて修法と勉学の合間には徹底した掃除が課せられます。肉体的にも極限状態のなか、12年間をかけて宗祖伝教大師が今なお生きておられるがごとく、「不惜身命」の思いで伝教大師にお仕えしているのです。

「記録では、先代の宮本祖豊師（延暦寺一山・観明院住職）まで、歴代116名の侍真僧のうち籠山途中に病気で死亡した者が27名。籠山行を遂業した後、行中の病を起因に病死した者が2名、入行した者4人のうち1人が命を落としたことになります。

比叡山の修行の厳しさを表す言葉に論・湿・寒・貧とありますが、十二年籠山行はこのすべてを備えた究極の修行なのです。

伝教大師御廟の鮮やかな色彩

侍真の前行「好相行」

不眠不臥で仏様を感得

侍真となるためには、その資格を得る前行として、『梵網菩薩戒経』の教えに基づき、三千もの仏様それぞれに対して一々焼香、礼拝で散華し、各仏様のお名前を唱えながら五体投地の礼拝を行うという「好相行」を修し、仏様の好相（三十二相八十種好＜仏様の姿の特徴＞）を感得しなければなりません。

「五体投地」とは起立合掌礼拝から五体すなわち両肘・両膝・額を地面に投げ伏した状態で両掌を空に向けての礼拝を繰り返すもので、好相行ではこれを1日3千回、不眠不臥にて修することによって生身の仏を感得するまで続けるのです。

仏を感得することで初めて大乗円頓戒を自誓受戒し、十二年籠山行に入ることが許されるという極めて厳しい修行ですが、好相を感得したか否かの判断は先達の侍真に委ねられます。先達に感得を認められなければならないのです。

先達から仏の好相を感得したことが認められると好相行は満行となります。その後、戒壇院の釈迦如来像の御前で「自誓受戒」（自ら誓い、受戒する）し、初めて十二年籠山行に入ることとなります。

先代侍真の宮本師は足掛け3年、ドクターストップを経て675日をかけて好相行の修行を積み、同行を修めました。

自誓受戒へと進む渡部師（写真左・右は前侍真の宮本師）

侍真僧の日課『開山堂侍真条制』より

午前3時半　出定（起床）・開拝殿戸
午前4時　朝課（依『国清百録敬礼法』）所為祈念・『梵網菩薩戒経』・『般若心経』七巻・宝号七返
午前5時　侍真備御小食（大師宝前）献供作法・大黒天法楽
午前5時半　侍真小食
午前6時半　弥陀供一座・『護国三部経』読誦・『大般若経』真読真言等
午前10時　献斎供養（大師宝前）・献茶（大師・弥陀・文殊）
午前10時半　侍真斎食

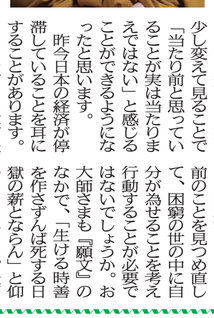
この間御廟や境内の清掃

午後4時　晩課（依『国清百録敬礼法』）・敬礼三宝・『梵網菩薩戒経』輪読
午後5時　閉拝殿戸
午後9時　入定（就床）

※日課のほか、毎月15日と晦日には布薩を修する

侍真僧 渡部光臣師に聞く

「当たり前の見方を変える」



十二年間お大師さまにお仕えしてきまして、不便なことがたくさんありました。しかし、それらが有ればあるほど日毎に「ありがたい」という気持ちが強くなってきました。

「無いものを数えて嘆くのではなく、有るものを数えなくてはならない」と思うようになってきたのです。

今日我が国は十分豊かになり、死と隣り合わせと言われた浄土院での侍真としての生活も命の心配をせずに勤められるようになりました。現在の物差しでは当たり前のことですが、光の当て方を少し変えて見ることで「当たり前と思っていることが実は当たりまえではない」と感じることができるようになったと思います。

昨今日本の経済が停滞していることを耳にすることがあります。しかしながら日本が豊かな国であることは間違いありません。無いものばかりを欲しがって、生かされていることに感謝できない。人は当たり前になってしまったことに感謝することを忘れがちです。

ポジティブになれない時代ではありますが、この国に生まれたことに感謝し、当たり前のことを見つめ直して、困窮の世の中に自分が為せることを考え行動することが必要ではないでしょうか。お大師さまも『願文』のなかで、「生ける時善を作さずんば死する日獄の薪とならん」と仰っておられます。最初はなかなか難しいと思いますが、それを行うことが自分自身の成長と幸せに繋がるのではないかと思っています。

（インタビューの詳細は後編に続く）